

「価格高騰を招いた三つの要因」

目 次

1. 鉄鉱石価格の急回復	
①15年でみた鉄鉱石価格と鉄スクラップ価格の関係 -----	1
②16年における鉄鉱石価格の動き -----	1
③唐山の世界園芸博が助長 -----	1
2. ビレット輸出も価格対策 -----	2
3. 国内電炉の製品価格対策 -----	3
4. 今後の見通し -----	5

2016年5月18日

(株)鉄リサイクリング・リサーチ

代表取締役 林 誠一

今回の想定外な鉄スクラップ価格高騰を招いた要因を三つ挙げる。1.は鉄鉱石輸入スポット価格の急回復 2.は中国の輸出ビレット価格の改定による鉄源不足現象 3.は国内電炉メーカーの製品価格対策である。このうち二つは中国を発信地とする海外要因であり、一つが国内要因だが、それぞれが複合して顕在化したと考える。

1. 鉄鉱石価格の急回復

始めに16年3月7日に中国が輸入する鉄鉱石スポット価格が急騰した（事件？）を取り上げる。同日に行われた全人代での内需喚起策が起因した。そこで鉄鉱石輸入スポット価格と鉄スクラップ価格（ここでは日本の鉄スクラップ価格を牽引している関東地区炉前H2価格）の関係を分析した。

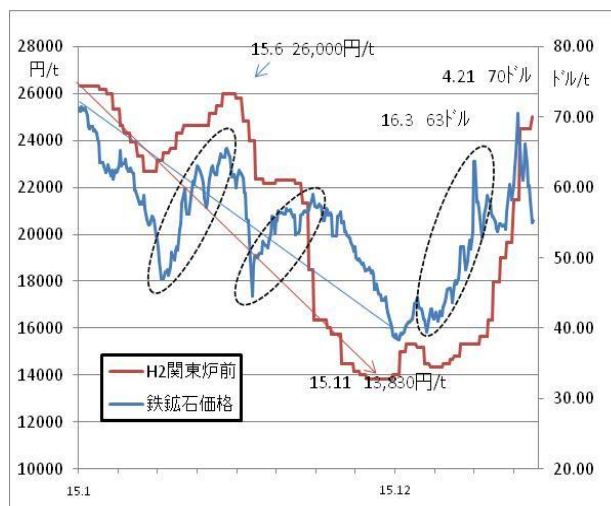
① 15年でみた鉄鉱石価格と鉄スクラップ価格の関係

中国の鉄鉱石輸入スポット価格は、鉄鋼生産減産表明と資源メジャーの能力増強投資による供給力増加とのギャップから、15年1月70ドル/tは同年12月には40ドル/tに1年間で43%近く低下の過程を踏んだ。一方、鉄スクラップ価格（関東炉前H2）は同年1月の26,300円/tから12月は13,830円/tへ47%下落し、鉄鉱石価格下落率とほぼ同率を示している。鉄鉱石は高炉メーカーの主原料であり、鉄スクラップは電炉メーカーの主原料だが、今や世界では高炉メーカーも使用し、かつ製造された製品価格はマーケットにおいては差別されている訳ではない。しかし製鋼法別にみた世界の粗鋼生産シェアは7対3であることから、鉄スクラップ価格は鉄鉱石価格に概ね連動した動きとなっている。

② 16年における鉄鉱石価格の動き

そうした中、16年2月以降、鉄鉱石価格は、前年末の40ドル/t台から3月7日64ドル/tまで戻す動きを示した。わずか1ヶ月強の短期間で+55%に及ぶ急騰は、15年中2回あった山谷とは異なる動きである（図表1）。これは3月7日、8日に全人代で発表された内需喚起策を受けた投機的な動き（過去2回の山谷を需給バランスの結果とすれば、今回は人為的なもの）と解釈する。

図表1 鉄鉱石価格と鉄スクラップ価格



② 唐山の世界園芸博が助長

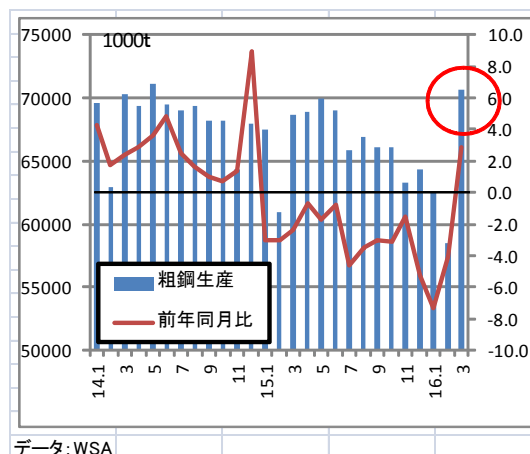
ほぼ同時期に、唐山を主体とした鉄鋼増産と鋼材価格改定が上記②を助長した。北京南東200kmにある唐山は中国鉄鋼産業の中心地だが、今年4月～10月世界園芸博が開催されることを受けて、期間中の環境対策（この地区がスモッグの元凶となっている

と言われる) から減産が行われることが決まり、3月は前倒し生産と製品価格改定(減産期の収益確保対策?)が行われた。中国の粗鋼生産は15年1月から前年を下回って推移していたが、16年3月は14ヶ月ぶりに前年同期比+3%増の70.6百万tとなり、しかも月間過去最高を記録した。3月の1日あたり粗鋼生産量は14年6月に次ぐ過去2番目の水準である。唐山がきっかけとなって全国に拡がった鋼材価格の上昇があり、価格差が改善したことにより操業を停止していた「ゾンビ」企業の復活があげられている(設備過剰問題に取り組む表明からすでに1年以上経過しているが、対策はあまり進んでいないと感じさせる動きである)。

この結果、3月7日64ドル/tに急騰後、従来なら元の下降ペースに早々にもどると想定した鉄鉱石価格は、50ドル/tから60ドル/tで1ヶ月以上ふみ留まり、4月21日は70ドルまで戻す動きとなった。

日本の鉄スクラップ価格は15年11月の13,800円/tを底に16年2月の14,000円台までほぼ横ばい状態で推移したあと、3月になって週を追うごとに増加をたどり、5月10日にはほぼ倍の25,000円/tに至っている。

図表2 中国の粗鋼生産(月次)



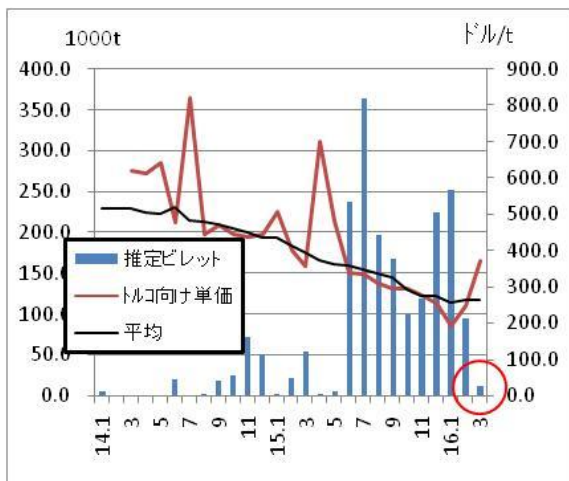
2. ビレット輸出も価格対策

内需低迷によって余剰ビレットのはけ口を輸出に求めた。この時、ボロンを添加することで13%の還付けが得られる付加価値鋼材の輸出奨励策を利用して始まったボロン添加ビレット輸出は、15年1月より制度改定により廃止され、代わってクロム等其他合金鋼添加ビレットとして継続している。15年は2,600万t(前年1,380万t)ものビレットが世界中に展開されたと推計される。この動きは16年になっても基本的に変わりなく1-3月は推定650万t(弊トピックスNO34備考3)となり、年率2,600万tのスピードに変化が起きていない。問題点は2つある。一つは相手国の電炉操業を代替することで、16年も世界の鉄スクラップ流通を抑制することに働く。二つは鉄スクラップの世界相場に影響を与え、ビレットの輸出価格が鉄スクラップ価格を決めるしくみが続く事である。15年を見ると1月の平均輸出単価436ドル/tは、12月には276ドル/tに約37%低下し、なりふりかまわない?と思われるような安値ビレットが鉄鉱石の価格低下に合わせて月を追うごとに展開された。しかし16年になり1月は前月の276ドル/tから258ドル/tに低下したが、2月は264ドル/t、3月は265ドル/tとなり低下に歯止めがかかった。鋼材価格の改定と同じくしてビレットに関しても安値受注を見直す動きが現れたと推察される。そして安値ビレット価格の見直しは、世界最大の鉄

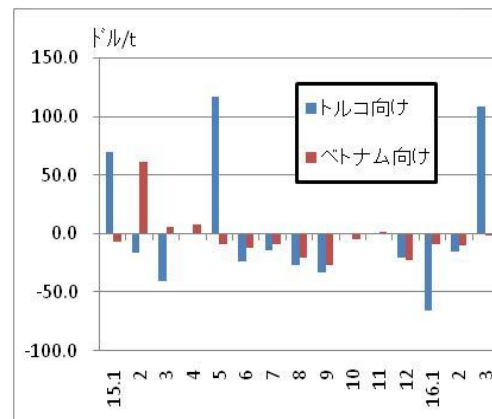
スクラップマーケットであるトルコで敏感な反応を示した。

中国のトルコ向けピレット輸出推定量は、14年 20 万 t 弱だったが 15 年は 150 万 t に急増した。しかし 16 年は 1 月 25 万 t のあと 2 月はその 6 割減の 9.5 万 t、3 月はさらに 1.1 万 t に激減し、逆に平均単価は、1 月 193 ドル/t (平均 258 ドル/t)、2 月 249 ドル/t (同 264 ドル/t) となり、平均に対して大幅に安値経緯する中、3 月は 373 ドル/t (同 265 ドル/t) に逆転している (図表 3、4)。安値契約をキャンセルし、高値販売を行ったため量が激減してトルコの鉄源対策を混乱させ、結果、米国、欧州、CIS などからのスクラップ輸入を増加させて対応に追われた。このためトルコ向けスクラップ価格は 2 月 170 ドル/t 台から 300 ドル/t 台の急騰となる。その結果が同じ主力ソースである米くずのアジア向け価格へ波及したと推察される。

図表 3 トルコ向け中国ピレット輸出推定



図表 4 平均単価との差異

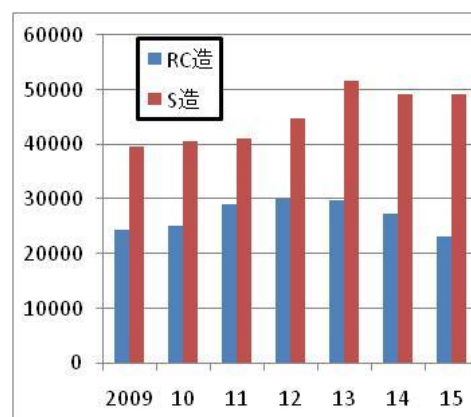


安値契約のキャンセル→鉄源不足→スクラップ輸入増→スクラップ価格高騰→世界へ波及

3. 国内電炉の製品価格対策

国内の建築活動を構造別着工床面積により、鉄筋コンクリート造 (RC 造) と鉄骨造 (S 造) 別に最近の動きをみると、RC 造は 12 年をピークにその後低迷が続き、15 年は 09 年を下回る低水準で推移した。一方 S 造は 13 年以降伸び悩んだ状態となり、15 年は前年比 0.3% のマイナスだった。さらに 16 年 1-3 月の前年同期比は RC 造 +0.8%、S 造 -6.7% であり未だ活気に乏しい。RC 造は鉄筋工の不足や工期面で S 造にシフトする動きがあるが、その S 造も低迷が続い

図表 5 構造別建築着工床面積 (1000 平米)

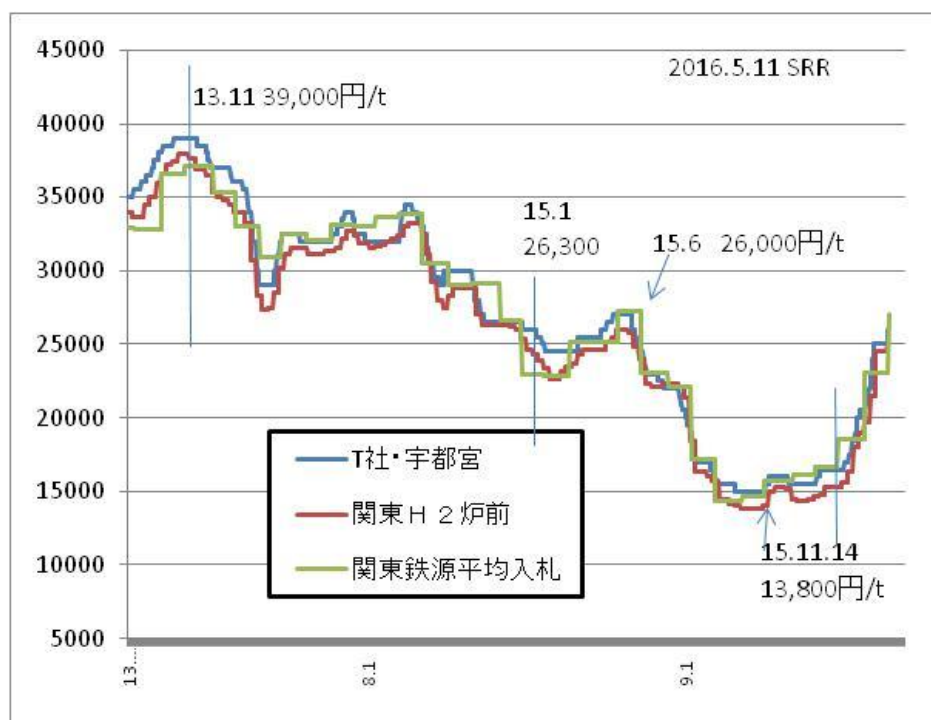


ている。オリンピック需要は秋ぐらいから出てくると予想されているが、6ヶ月後に材料発注が行われるといわれる着工床の足元は芳しくない。メーカーは賢明な減産対策をとっているが、3月末の「ときわ会」H形鋼在庫は前月末比5.5%増を示した（その後4月末データは2か月ぶりに20万tを下回るなど改善気配が見えだしては来た）。

供給サイドである電炉メーカーは電力コスト上昇の中、製品価格の低迷が続いているため、原料価格との差（スプレット）は限界を超え、生き残るすべは製品価格改定にしか道はない追い込まれた状態が続く。そんな中、3月7日鉄鉱石輸入スポット価格が急騰した。しかもその後も50ドル/t～60ドル/tの範囲で横ばい、4月21日には70ドル/tラインに達した。この背景に中国の生産回復と鋼材価格改定があることは前述の通りである。日本においては製品価格改定を打ち出すチャンスが到来した。

そして電炉大手T社は4月18日2年5ヶ月ぶりに全品目の価格改定実施に至る。この時、原料としての鉄スクラップ購入価格は3月17日17,000円/tから5月10日には26,000円/t（+52.9%）に至っている。行われた購入価格改定回数は12回におよび、一気に値上げできなかった苦汁さが伝わってくる。しかしT社購入価格が国内価格を先導する状況にあることから、関東地区H2炉前価格は3月7日15,330円/tから5月9日には25,000円/t（+63.1%）に急騰を示す（図表6）。

図表6 鉄スクラップ価格推移（円/t）



4. 今後の見通し

16年3月から始まった鉄スクラップ価格高騰について3つの要因をあげた。今回の高騰は高速情報化社会において図らずも鉄スクラップが世界商品としてグローバル化している証でもある。市況品だからやむを得ないといった「流され感覚」は捨て、国際的な広い視野をもって冷静に分析し行動する姿勢が必要と教えている。

「短期」

高騰の要因はいずれも実需の盛り上がりによらず、投機的、販売戦略的な要素が高いことから、沈静化に向かうのは時間の問題と考える。

5月11日の関東鉄源協会入札は27,000円/tで5,000t落札した。また、直近の輸出成約はH2 29,000円/tだったが、これは高値すぎ。入札の残り札は25,000円/tであり、13日の関西鉄源協会入札は23,530円/tで落札し、高値は天井に近づいていると推察される。

- ① トルコの買いは6月6日から始まるラマダンまで。5月中旬になり天井感が現われ始めた。
- ② 但し、中国の粗鋼生産動向が鍵をにぎる。唐山地区の生産は世界園芸博で落ちても、全中国では鋼材価格upが浸透することで、停滞していた企業が復活しており、減産方針の中央政府がどうコントロールするのかにかかわる。
- ③ 中国の4-6月粗鋼生産が調整しきれずに経緯するとすれば、鉄鉱石価格が10-12月期には35ドル/tに下落するという年初の予想は上方修正せざるを得ない。ただ中国内の鋼材市況は実需を伴わない増産により緩み始めている。
- ④ いずれにしてもスクラップ価格は再び上がることはなく、夏から秋にかけ 23,000円/t~20,000円/t で推移すると予測する。

「中長期」

中国の鋼材輸出からはじまる供給過剰が次々に世界に及ぼす影響は、依然として揺るぎない（「中国の四大波と日本」弊ピックス NO31 参照）。今回起きた高騰現象は中長期下降トレンドのなかでのひとつの出来事に過ぎず、2030年鉄スクラップ10,000円/t時代到来は幻想ではないことを見据えた事業運営を怠らないことである。

以上

調査レポート NO 35

「価格高騰を招いた三つの要因」

発行 2016年5月18日（水）

住所 〒300-1622 茨城県北相馬郡利根町布川 253-271

発行者 株鉄リサイクリング・リサーチ 代表取締役 林 誠一

<http://srr.air-nifty.com/home/> e-mail s.r.r@cpost.plala.or.jp